



幼児の舞踊について

——近來の傾向を痛心す——

倉 橋 惣 三

近來は、幼稚園で舞踊全盛の觀がある。それについて、いろいろの方から屢々質問を受けるので、私の考へを卒直に述べて見る。

先づ、大體論として、幼児の舞踊そのものについて、私は反對をするものではない。幼児に適するものは何でも幼稚園にとり入れていゝと思ふ見地からして、舞踊も亦これを否定するものではない。殊に或る人達のやうに毛ぎらひをしたりするものではない。踊りといへば事々しく聞えるが、おどり度いのは幼児の本性である。彈力に富んだ運動性の生活、それが幼児生活の大きい特質であつて、ある意味に於ては、幼児はたえず心と體とを踊らして居るといつていゝ。その潑瀾たる幼児達に對して存分におどらせてやり度いところを思へ、それを抑えてならないのは勿論である。自分が幼児達といつしよに、幼児達のやうにおどれないことをこそ悲むことはあつても、幼児達のおどる手とおどる足を、しかつめらし

く止めやうなど、思ふものではない。

しかし、その私として、近來の幼稚園の舞踊全盛の實際に對しては、頗る不安な感を禁じ得ないことがあるのである。

「一」、何ごとに限らず、幼稚園が一つのことに偏し過ぎることは、深く警戒しなければならぬことである。幼兒の生活は極めて廣範な範圍をもつ。變化と多様とは、幼稚園生活指導の格言でなくてはならない。若し何かの一方に偏り過ぎるならば、そのことがそれ自身として、いくらいゝことであつても、幼兒生活としては正常を逸するのである。それも、幼兒自らが、何かの自分達の理由によつて、或る期間一つのことにと凝り偏るといふやうなことから、強ひて咎むべきではないが、そういふ場合としても適當な多様性を與へてゆくことが、幼兒教育者の一つの任務でなくてはならない。況んや、與へる方で一方に偏ることがあつたりしては、其の害甚だ尠からずといふべきである。ところがどうも幼稚園にそういう傾向があつて困るのである。昔からフレーベル正統派と自稱する幼稚園で、フレーベル恩物一點張りの教育をしようとしたりしたのもそれである。フレーベル恩物そのものゝ是非は暫く別としても、それに偏して、他の無限に廣い幼兒教育手段を忘れたのは、非常な誤りであつたのである。モンテッソーリが流行すると、その教具を採用した限り、またもや、それ一點張りになつたりした。これも、偏することの弊害をなしたものである。その他何、何、劇場の藝題でも取りかへられるやうに、幼稚園の中

必要項が變遷してゆくのは、またしても行はれた誤りであつた。しかも、それが、その幼稚園の何か特有の主義主張——理論を基礎とした——によるものならば、他人の眞似を許さないことゝもいへるが、世の流行につれられて移つてゆくのでは、見識のないも甚しいといはなければならぬ。馬鹿の一つ覚えといふ俗諺がある。少々失禮ないひ方であるが、そんな感じをさせられることも無いではない。靜かに考へて見ても、そうした偏した方法で、幼兒の全生活の開發が指導出来るものではないのである。

近來の幼稚園の舞踊全盛にも聊か此の趣きがないではあるまいか。甚しいのになると、幼稚園教育即舞踊とでも思つてゐられるのかと見える程、舞踊專一で、その爲に、從來からのいゝ教育法も忘れられましてや、新らしく多種多様のいゝ教育法を發見してゆくことが、全然無くなつて仕舞つたりしてゐる。これでは、舞踊そのものに如何に貴い効果があるにしても、われ等の幼稚園としては許されない偏りである。

殊に、一般の事實として、その流行の要項が、理論的のものである場合よりも、興味的のものである場合に、斯うした傾向が一層容易く、且極端に行はれるやうである。兒童劇の流行が近頃のその著しい一つであつた。兒童劇が盛に幼稚園で行はれた時、勿論、理論的に之れを採用した人も多くあらうがその興味性が與つて大に力あるは少くも否定出来ない。子どもゝ面白がり、親達も面白がり、先生にも面白いとあつては——そして、どこかに理論の背景があり得るとしては——大河を決する様な勢で熱中

せられるのも無理もない。無理もないがそれでは困るのである。その児童劇は一寸下火になつたようだが——なつて貰はなくは太に困る——が、それに代つて盛になつたのが——少くも社會事實としては——即ち舞踊なのではあるまいか。實際、舞踊は、お話よりも、製作よりも、誰れにでも面白い。少くも派手で楽しい。そこで、その興味が持込まれた以上、或る處まで酔ふ様に、それ一方になるのは勢の然らしめる處だらう。しかし、そう偏しては困るのである。舞踊ばかりで幼稚園が濟むものとは、舞踊そのものでも思つては居まい。誤りは人にあるのである。見識なく、靜かな考へなく、幼兒生活全體の見渡しなく、おどれ／＼で踊りづめる浮いた人の誤りにあるのである。斯うまでされては舞踊の方でも面くらうかも知れない。況んや、幼兒に於ておやである。

〔二〕、分量的に適度な採用をしたとして、次に近來の問題になるのは、舞踊の流派——といつて置くの餘りにまち／＼なことである。勿論、多くの研究者、否創始者によつて、いろ／＼質の違つた舞踊が出来ることは、舞踊そのもの、發達のためにはいとことである。私のこゝにいふのは、それが幼稚園で行はれ方についてである。

今日、幼兒の舞踊について、我國に幾派の別があるかを私は詳しくは知らない。しかし、實際色々の幼稚園で見るところによると、何先生々々々の振付けといつて、随分本質の違つた舞踊が、まちまちにといふよりも、ごた／＼に行はれてゐるやうに思はれる。その一つ／＼の是非は別として、斯うませこ

せに與へられては、幼兒は甚だ迷惑なことであると思ふ、折角一派の主義で慣れたものが、忽ちして全然違つた主義の振りを與へられる。また直ぐに、他の式のものも與てられる。之れでは、それ／＼の式が、其の式で徹底しようといふ効果が互に消されあつて仕舞ふに相違ない。消されあふだけなら罪はないとして、それ以上妙なことにならぬとも限るまい。

それ／＼の式について、私は批評しようとはしない。たゞ、すべての式を、それ／＼の特質に於て尊敬するとして、それだから、斯うしたぢちや／＼の採用のされ方が出来ない筈だと思ふのである。勿論各自の流派に立つ創始者は、それを獨自のものとして主張し、幼稚園にもすゝめられるに相違ない。幼稚園の先生は、その説をよく伺ひ、よく研究して、どれか一つを——少くも或る期間は——續けなければならぬ。他所で用ゐられて居るからとて、一寸眞似て見るといふ風なしかたは禁物である。但し、一度始めた式は、やめてはならぬといふのではない。別の式の方に賛成する處が多ならば、それを採り入れるべきは言ふまでもない。たゞ其の時は、その新らしい方一式にすることである。兎に角、舞踊は其の創始者に於て、一定の藝術的根據をもつものである以上、みだりに八宗兼學を幼兒にさせることは甚だよろしくない。

この點が近來随分無茶苦茶の様である。中には、手を動かし足を動かしさへしてゐれば、皆一つものだと考へて、頭から各流の差別をしてゐない人もあるらしい。幼稚園の先生自身がそんなでたらめ

は、始めからお話にならない譯であるが、兎に角困つたことである。

苟も、何先生の式を學び、それを我が幼稚園に採り入れる以上、充分その先生の主張を理論的根據に於て究めてからでなくてはいけない。大切な我が園の幼兒に與へるものではないか。自分で譯の分らない踊り方などを、たゞ型で覺えて採り入れたりしてならうか。子どもに見せる繪本一冊、あなた方は周到に、神經質に研究し撰擇なさるではないか。幼兒をして踊らせるものを、人の噂さや流行の評判位で手あたり次第に採り入れて來ていゝものであらうか。それも先生方が習つて見られるは勿論いゝ。いくらでも習つて見て研究——覺えるのでなく、先づ其の價値を考究するのである——されるがいゝ。しかし、自分が習つて見ることゝ、幼兒に與へることゝは違ふ。うつかりしたものを與へてはならない。

私は此點を考へる時、なんとなく、ぞつとする様の氣がする。近來の傾向が、幼兒の舞踊に對してたゞ之れを用ゐるだけで無考究、無批判でやつてゐる先生方があるはしないかと思ふからである。若い方に殊にそれが多いのは己むを得ないとして、ほかのことでは、よく幼兒教育の本道の分つてゐる経験家で、舞踊だけには、まるで無見識な採用のしかたをしてゐる人があつたりするらしい。舞踊全盛の勢とはいへ痛心にたえぬことである。

兎に角く、舞踊については一園一式、一流一園といふことにし度い。ごもくめしダンスは幼兒の腹をこわすものである。

〔三〕、以上、近來の傾向に對し最も深く感ずる心配の點を遠慮なく言つて見たのである。この二點をよく注意して頂けば、まづ大過なきを得ようと思ふ。しかしまだ、もう少し内容に入りて質問を受けることがあるので、それを簡單に答へて置かう。つまり、私は、幼兒には、どういふ舞踊がいかといふ間に對して、極く大ざつばな標準を立てゝ見るに過ぎないが。

(イ)、幼兒の舞踊は、藝術には相違ないが、すべての他の幼兒の藝術と同じく、所謂原始藝術に屬するものである。原始藝術は純生命の藝術であり、文化藝術のやうに、美として分化した藝術でもなく、型として洗練された藝術でもない。そこで美ではあるが美そのものが浮き出てるものでもなく、形はあるが型としての嚴しいきまりが既成せられてゐるものでもない。殊に舞踊に於て一層それが甚しい。心のリズムに踊りはするが、美のために踊つてはゐない。表出の形は持つてゐるが、型の味にまで築かれてはゐない。従つて、幼兒の舞踊は全生活的で自然で、自由なものでなければならぬ。丁度、野蠻人といはれる民族の中にある舞踊に類するものなのであつて、文化の發達した藝術的に洗練せられた舞踊とは違ふのである。

(ロ)、野の舞踊は運動としては、筋肉の遠心的運動を主とするもので、文化的舞踊のやうに、筋肉の求心的曲折を主とするものではない。手の舞ふ儘、足の躍ぶまゝ、伸びてゝ伸びてゆく處に、生命の溢れ其のものゝ味が味はれるのである。踊るものにも、看るものにも、そうなのである。とい

つて亂舞といふ譯ではない。平均と均齊は生命が自然に有して居る法則である。その生命の自然の法則だけを法則とせる舞踊なのである。

殊に此點に就て一考して置く必要があるのは、我國に於ける古來の舞踊は非常に舞踊藝術として發達してゐるものであつて、藤間にしても花柳にしても、山村にしても八千代にしても、關東と關西と多少の違ひはあるにしても、舞臺のおどりとして、座敷の舞ひとして、洗練の極緻に入つてゐるものである。従つて、我國で昔からいふ舞踊といふ名には、之等の至妙繊細な藝術としての舞踊の意味が付き易い。之れは幼稚園で用ふる幼兒の舞踊の發達のために、却つて差支へたりすることである。同じく踊るので、幼兒の踊り度い踊りは、そうした純藝術の味に凝つた踊りではない。技巧の極緻で筋肉運動に味を出す。江戸風の優美な舞踊ではない。勿論、昔でも今日でもあるやうに、子どもの時から踊りを仕込んで置くといふ意味の場合は、全く別の見地に立つことで茲には其の問題を離れて、今日吾々が幼稚園教育の手段として採り用ふる舞踊は、それとは全く別個の見地が出た、別箇の世界のものなのである。

(ハ)、もう一つ、野の舞踊は、生命の樸素な運動として、ハーモニーよりもリズムを王にする。藝術としては言ふまでもなくハーモニーの方が高級である。しかも、幼兒としては音樂に於てそうである如く運動に於てもハーモニーよりもリズムを求め、またそこに満足してゐる。進み過ぎたハーモニーは却つて幼兒には無理なことになるのである。勿論ハーモニーが少しでも入つてはならぬといふ譯ではない。

簡単なハーモニイは、幼児も喜ぶものであるが、ハーモニイを主として發達した舞踊が、幼児にも適するものと見たら、幼児として買ひ被られて迷惑するのである。こゝで、舞踊に於て、幼児のものが、成人や少女のものと大に差別せられる。況んや藝術家の舞踊とは全く別のものである。

英國や米國の幼兒の舞踊は、インチャン・ダンスなどを基準とするものが多い。之れ皆リズムの舞踊である。また同時に、野の舞踊である。我國の近來の或る傾向は、之れと全く違つた方向に向つてはゐるまいか。過ぎたるは及ばざるが如しとは、こゝに最よく當てはまつた教訓である。

(ニ)、だから、幼兒の舞踊は、要するに撲素、簡單、形は自由、味は野趣、優美よりも潑刺、技巧よりも自然、であり度いのである。そういふものであつていふのでなくして、そういふものでなければならぬといふのである。

〔四〕、尙ほ餘計のことを一言する。幼兒の舞踊は全然、幼兒自身のためである。見物人のための藝ではない。故に、若し、眞に幼兒に舞踊を與へる意味を解するものならば、つとめて、見物人を避けてやらなければならぬ。假りに見物人があつても、それは、いつしよに踊る見物人でなければならぬ。入りかはり立かはり、舞ひあひ踊りあふお互同志でなければならぬ。見てゐる間も、手びようし、足びようし、聲を合はせて唱ふ連中ではなければならぬ。見物人としての見物人などは、幼兒の生命の舞踊の神聖に對して、寧ろ怪しからぬ無禮ものである。幼兒のために其の神聖を保護する人々は、そうい

ふ見物人を追つばらつて踊れなければならぬ。曰く、幼児舞踊會。曰く、幼児演藝會、咄々、なんの
ことだと腹立たしくなる。幼稚園の遊戯室に觀覽のさじきを造つてゐる處があるとかいふことを耳にし
たことがあるが、願はくは、われ等の幼稚園教育界のために、私の耳の聞き誤りであつてもらひ度い。

(一四・八・二十二)

幼い兒を護る文部省令が出る

——幼稚園と保育所を一緒にして向上策——

現今我國に於ける幼稚園の數は約一千で滿三歳から學齡までの幼兒を希望者に限り
收容してゐるが最近文部省ではこれが改善を目的として新に幼稚園令を發布する意向
で目下協議研究を進めてゐる。この新令の發布は別に強制的といふ意味ではなく、た
ゞ勅令を以て畫一を圖る事になるらしい。當局としては現在の託兒所を今少し組織的
にし幼稚園をもつと一般的なものとして將來は兩者を合體したものを幼稚園と稱せし
めやうとの希望である。今度の改善の燒點は保姆の資格を向上せしめて對世間的信用
を高めこれが待遇を改善して恩給年功加俸の規定を設くるのが幼稚園改善の第一歩と
言はれてゐる。幼稚園を少くとも現在の小學校と同様に全國的に普及せしめこれに相
當の資格を與ふることも急務とされてゐる。(東京朝日による)